

大島区地域協が要援護世帯除雪費助成事業で意見書提出

2年ばかりで調査、研究重ね4項目の提案



大島区地域協議会。写真は昨年6月のもの

大島区地域協議会（石塚隆雄会長）が21日開かれ、上越市の要援護世帯除雪費助成事業に関する意見書を同日、村山市長に提出しました。

同地域協議会は要援護世帯除雪費助成事業について、2年前から、

① 除雪道路から玄関前までの取付道路にあつては、降雪の都度、除雪を行う必要があり、屋根雪の除雪以上に苦痛が伴う作業であることから、「道付け除雪」への支援の仕組みについて検討すること。

② 自然落雪式住宅では、屋根から滑り落ちた雪が2階の窓をふさいでしまうほど堆積し、危険な状態となることから、軒下に堆積した雪の除雪費を助成対象とすること。

③ かやぶき屋根をトタンで覆った自然落雪式住宅は軒高が低いこともあって、避難口の確保のためには落雪した雪を頻繁に除雪する必要があり、ひと冬の除雪経費が現行助成限度額を上回る場合もあることから、実情に沿うよう助成限度額を引き上げること。

④ 助成限度額を既得権とみなして、必要以上の除雪を行っている世帯も見受けられることなどから、公平性の確保に配慮しつつこれを抑制する観点から、対象経費の一定割合（10%程度）を受益世帯の負担とする制度を検討すること。（ゴシツクは橋爪）



【日本海からみた米山と尾神岳】

佐渡汽船直江津-小木航路を船で進むと、故郷の山々がとても懐かしく見えます。標高993メートルの米山はどっしりしていて、ほぼ三角形の山。直江津港を出て小木港に着くまでずっと見えました。航海をする船にとっては目印になります。（19日、「こがね丸」の船上から撮影）

要援護世帯除雪費助成事業は平成21年度、市内の3082世帯が利用しました。同事業については3月議会でも大きな議論となり、私も一般質問で吉川区や大島区などの例を示しながら改善を求めてきました。答弁で村山市長は、「要援護世帯除雪費助成事業につきましては、訪問世帯から寄せられた御意見、御要望を踏まえた上で、一般の世帯との均衡や制度の普遍性にも考慮しながら、多雪区域とその他区域の区分のあり方など現行制度の検証を行うとともに、総合的な支援のあり方について検討するよう指示した」とのべています。

シリーズ 上越市内の橋

第45回 一本木橋



「一本木橋」と書いて「いっぽんぎはし」と読みます。市道下稲田戸野目線にあり、まさに稲田と戸野

目をつないでいます。近くに、映画『ふみ子の海』のロケで有名となった旧小柳医院の建物があります。川は保倉川の支流で小さな川ですが、大雨で下流では浸水被害をもたらすことがあります。橋長は約20メートル。竣工は1955年（昭和30年）の5月です。

大島区地域協議会の今回の意見書は、多雪地帯にある地域自治区の意見書として市政に大きな影響を与えるものと思います。

冬期保安要員継続など要望次々と

参院選後、吉川区内で連続的に開催している「橋爪法一を囲む会」でも雪対策について、「道路除雪体制を強化してほしい」「冬期保安要員制度の継続を」などの声が次々と寄せられています。



米山町内会での囲む会

春よ来い 第一八回 いろいろ

先日、約一か月ぶりに柏崎の父を見舞いました。妻と一緒にです。数ヶ月前から「だ
いぶ、耳が遠くなったな」とは思っていたのですが、義父の耳は数日前から急に悪化
したとのことで、この日はほとんど聞えない状態となっていました。

「困ったもんだ、まったく……。急に聞こえなくなっちゃった。どうしてこうなるん
かいね」。こちらから話をしても全然通じませんが、義父の言葉はよくわかります。
耳が聞えなくなってしまうた義父は、重度の難聴になったことが信じられないので
しよう、盛んに「困ったもんだ」を繰り返します。

私はどうしていいかわからず、義父の聞き役に徹していましたが、妻の方は途中か
ら会話ができるようにと動き始めました。

「なにやっただけかやな、急速になったやつは……。急速に治るかなあとと思っ
て淡い望みをもったりして……。と義父が言ってから、それまで私と同じく聞き役一
方だった妻がニコニコしながら、応じました。大きな声で「ある時、急に聞こえるよ
うになったりするかも」と言ったのです。

それからしばらく、妻と義父との会話が続きました。

「どうしてこんなになるのかね。風邪引いたわけでもないし、やっぱ、歳をとると聴
覚の周期がおかしくなるがだな」

「みんないろいろだこて」

「ああん？」

「いろいろ……」

話がまったく通じないことから、妻は今度は立ち上がり、義父の耳のそばまで行っ
て、言いました。

「いろいろ」

右の耳は完全にだめ。でも、左耳だけはそばで大きな声を出せば聞えるようです。

「いろいろかあ」

「そう、いろいろ」

話を通じた義父はうれしそうでした。いったん通じるとわかってからは、次々と妻
に話しかけてきました。

「そこちのおとつちゃん、おれほどにならんうちに死んじゃったがだろ。あの人、
おれより三年も若いだろ。おれよりずっと若いわけだ」「まあ、早く死ねや、こうい
うことにならん」

妻は、耳の具合を盛んに気にする義父の気持ちに少しでも楽にしてあげたいと思っ
たのか、わが家の母の耳の様子を持ち出しました。また、義父の左耳のそばまで行
き、大きな声で言います。

「うーんとね、うちのばあちゃんも耳が遠いよ」

「おれより遠いか」

「うん、どっこいどっこいじゃないの……」

「そんなことないだろ、ぬかよるこびさせるな」

質問されるたびに立って義父の左耳のそばに行き、大きな声で答える妻。その微笑
ましい親子の姿にしばらく見とれてしまいました。

集落の皆さんが不安に感じていること (集落数n=100)

